わたしのフォトメモ —— ディテール編

入江経一 =文・写真
KEIICHI IRIE

神話的な光景・ハノイのファサード

ハノイの空港から都市へは、農地の広がる平和な風景の中を行く。右手には3,000mを超えるファンシパン山がそびえている。やがて豊かな緑の中に、低層の赤い屋根と白い壁を敷き詰めたような郊外の住宅地が現れる。その生き生きとした眺めは、近年の著しい経済発展が都市の中心だけではなく郊外の様相をも変えつつあることを示している。記憶に残る過去の戦争（1960～75）の面影はすっかり払拭されているようだ。ここには400万の人口がある。

更に市内へ接近すると建物はもっと高くなり、都市の風景が眼前に広がってくる。ハノイの中心地には1887年からの仏植民地時代に、本国から派遣された行政官などが住んでいた区域、かつて“白人居留地”と呼ばれた区域があって、植民地時代の面影が多く残っているというが、この都市の周縁部に広がる住宅地は、そうした歴史の中から生まれた奇妙な混合物、西洋の夢と南国の記憶とが紡いだ奇妙な神話のような、不思議な光景をつくっている。

そこに並んでいる建物はどれも間口が非常に狭く、奥行きが長い。ちょうど京都の町家のような形で、その高さが4層ほどある。そうした細長い壁のような建物には、いずれも特徴的な西洋風のファサードが取り付けられていて、町並みを構成している。南国らしく、どのファサードも開放的で、バルコニーと大きな開口部を持ち、例外なく古風な手すりが付いている。また、どの建物もアジア風の屋根を持っているが、西洋の古典的な屋根（ゲーブル）のモチーフが時々加えられたりしながら、赤がねの屋根の上に鳳凰を頂いたような凝ったデザインの家々が、贅を尽くして高さを競っているかのように軒を連ねる。これらのデザインは、名もない人々の夢想によって生まれてきた集団の夢のようなものであり、デザインの善し悪しを論じるような視点からは遠く離れて、なお見るものに向かって魅惑を放っている。

こうして立ち並ぶ家々が、この都市を流れる川に沿って、まるで城壁のように並んで、途切れることのない壁を形成している。その眺めは、侵入者に対して威嚇する城壁ではなく、醒めない南国の夢のような都市の幻影として彼に入り込み、ついにはそのイメージは逃れ難いものとなる。 あるいはまた、この城壁はその内部に途方もない都市のカオス、混乱と喧騒を抱えているのだ。けたたましい物売りの叫び声、行く先も不明な無数の通行人、腐った食べ物のにおい、自分より大きな花束を抱えて歩く花売り、おびただしい数の壊れた乗り物とそのエンジンの吐き出す排気、夜暗がりの中で息を吹き返す蝙蝠（こうもり）の群れ、あらゆる水たまりに潜む色鮮やかな爬虫類（はちゅうるい）、太陽が沈んだ後も煮えたように熱い大気、そして明け方の一瞬だけに訪れる青い朝などである。

この城壁はまるで、そうした1日を終えて新たな1日を迎える夜の間に、この蜜実な都市が流失することのないように堰き止める堤防であるかのごとく見える。✽

ハノイ市街の外周部の川沿いに並んだ住宅群。タクシーから撮影した連続写真

いりえ・けいいち——建築家／1976年、東京藝術大学大学院建築科修了。東京工業大学篠原研究室を経て、1980年、入江建築設計事務所開設。1987年、パワーユニット スタジオ開設。
主な近作：T house（1999）、C house／町屋project（2001）、Ta house（2001）、Y house（2003）、M house（2007）など。